

B—39 ろうけつ染めの研究 (第2報)
防染性と亀裂性

大阪薫英短大 石沢 スミ
○山口 律子
奈良女大家政 吉川清兵衛

1. ろうけつ染めに用いるろうは種々あるがろうの種類、調合割合により性質を異にするので、それらを考慮して効果的に使用することが望まれる。第1報では市販パラフィン(7種)と、白ろう、木ろうとの調合ろうについて、防染性や亀裂性に及ぼす影響が大きいと思われる物理的性質について報告した。(関西支部研究発表会、1968年、5月)

本報では、実際にろう描き、染色を行ない、防染性を検討した。

2. 木綿布(3.5cm×10cm)を各一定の温度(60°C, 70°C, 80°C)のろうの中へ、5秒間浸漬し、風乾する。洗濯機ローラーで亀裂をつくり、建染め染料で染色した後、光電反射計で反射率を測定し、次式により防染率を算出した。

$$\frac{\text{防染部の反射率} - \text{染色部の反射率}}{\text{原布の反射率} - \text{染色部の反射率}} \times 100$$

なお、亀裂は肉眼観察を行なった。

3. 防染性では、ろう描きの際のろうの温度による影響が大きく、温度が低い程(60°C)良くなる傾向が認められた。調合割合による影響は少なく、パラフィンの種類による差が顕著であった。

一方亀裂性では、防染性のすぐれたろう程良く、パラフィン単独ろうでは、亀裂が不鮮明であり、又パラフィン調合率10~20%のろうでは、亀裂のまわりに“にじみ”が生じた。しかし、亀裂性では、全体に大きな変化は認められなかった。